

「琵琶湖周航の歌」のボート

B 2 須藤信行

大久保キャプテンに涙の感動を与えた「琵琶湖周航の歌」。私にとっては 50 年前の記憶をフラッシュバックさせてくれる歌でもあります。

実は私、この歌の世界をほんのわずかではありますが体験しております。京都の高校生だったときのお話です。ゼネストと呼ばれた町中の電車やバスが止まってしまう有り難い行事(個人的な感想です)がよくありました。その日は終日授業がお休み、クラブ活動もお休み。良い子のグループは、お家でマジメに自習に励んでおられたようですが、そうでないグループに属していた私は、ラッキー！とばかり遊び呆けておりました。

当時私は陸上部に属していましたが、悪友のなかにボート部のヤツがいて「今度のゼネスト、ボート漕ぎに行かへんか？」

練習場所は琵琶湖で、艇庫は滋賀県の浜大津にあったので、

「それはエエけど、電車もバスも止まってるやんけ」

「自転車で行ったらええやん」

というわけで、当日はでかいトラックがバンバン走る国道1号線の峠道を、ボートを漕ぐ前にケツを上げてガンガン自転車を漕ぎまくり、なんとか浜大津の艇庫に到着しました。

そのとき乗ったボートは、ナックルフォアという漕手 4 人にコ



ナックルフォア

ックス(舵取り)の 5 人乗りの艇。競技普及のた

めに考案された日本独特の艇で、ボート競技でよく見るボートに比べて幅が広く、スピードは出ない反面、安定性の高いものでした。とはいえ、池のボートしか漕いだことがなかったので、漕げば漕ぐほどスイスイ走るボートにいたく感動しました。オールをとられて腹に食い込む「腹切り」だけは注意せえ、ということでしたが、さいわい湖面はベタ凧、腹を切らずに済みました。

我々初心者チームも漕ぎに慣れた頃、琵琶湖大橋まで行こう、とだれかが言い出して、無謀にも悪ガキ一同北に向かって漕ぎ始めました。唐崎、坂本、雄琴と北上し、遠くに見えていた琵琶湖大橋が少しずつ近づいてきました。

関西方面の方はご存知かと思いますが、雄琴には当時イスタンプールがある国の名前の「お風呂屋さん」(その後、石鹼の国という名前になりましたが)が林立していて、沖から見た風景はじつに壮観でした。



琵琶湖大橋

ボートから見た景色は、

琵琶湖大橋の他にはそれくらいしか覚えていません。というわけで、「琵琶湖周航の歌」に歌われております高尚な名所・旧跡の世界とはほど遠いですが、とりあえず琵琶湖でレース用のボートを漕いだ経験がございます。

今から思えば、これが長い船員人生の最初の航海だったかも知れません。新米船員のころ世界一周航海でイスタンプールに入港しておりますから。

それから 50 年が経ち、気が付けば日本丸男声合唱団に入



団し、何曲もある難曲に苦しむ日々を送っておりますが、あるとき「琵琶湖周航の歌」をググっておりましたら、

「漕手 6 人舵手 1 人からなるフィックス艇に乗り、艇庫のある三保が崎(大津市)から時計周りに琵琶湖を一周するというもので……」というところで、そのとき艇庫の隅に古臭いボートがあつて

「フィックス艇と言うて、昔使っていたケツの滑らんボートや」という説明を受けたのを思い出しました。何気なく見た古臭いボートと「琵琶湖周航の歌」が結びついたので。

フィックス艇は、昭和の中頃まで国体や高校総体のレースで使われていたようです。現在、♪今日はいーまづーかあ、なーがは一まかあ♪の高島市今津町では、このボートを復元しレースも行われております。

興味のある方は、フィックス艇←[検索](#)でご覧ください。



復元されたフィックス艇